

# 世界に広がる池田平和思想

高 村 忠 成

## 1. はじめに

20世紀はその前半部分を第1次、第2次という世界大戦で覆われ、その後半部分は冷戦という脅威に晒されてきた。しかも、共産主義革命が世界のいくつかの地で成功したことも加わって、「20世紀は戦争と革命の世紀」といわれた。もちろん、その世紀には驚異的な科学・技術の発展もあり、人類の生活、文明は飛躍的に豊かになった。しかし、全体としては、戦争という暗い影がその世紀につきまとっていたことは否定できないであろう。

こうしたことから、人々は、21世紀になれば平和な、幸福な時代になる。いな、そのようにしていかななくてはならないという希望と決意に燃えた。だが無残にも、人々のこうした願望を踏みにじるかのように、21世紀に入って間もなく、地域紛争や民族戦争、内乱などが多発した。2001年9月11日には、アメリカで大規模なテロが発生し、「文明の衝突」の実現かと危惧されたのである。

しかも、こうした戦争やテロの危機だけではなく、人類は今、環境破壊、経済格差、エネルギー・食糧問題など、地球的な問題群に直面している。こうしたアポリア（難問）を解決し、21世紀を断じて、「平和と繁栄の世紀」にしていくことが、今日、切実に求められている。そのための方途を模索することが喫緊の課題なのである。

その際、重要なことは、人類の連帯である。問題点を共有し、協力してその解決にあたろうとする協調の精神を世界の人々の間に涵養することが不可欠となる。人類は今、かつてないほどの連帯を協調の紐帯の上に立脚することを求められている。そのためには、人々の間に、相互に信頼と友情の念を沸きいだし、将来に対する崇高なビジョンを掲げて、それを多くの人々が共有して、共に解決に向かって尽力していく姿勢が要請される。この意味で人類の明るい未来をめざして、人々を率いていくリーダーの存在は不可欠であろう。

こうした状況を考えると、今日、池田先生の平和思想が注目を浴びていることは刮目に値しよう。多くの政治家、知識人、大学・研究機関、そして個人が、池田先生の平和思想に関心を寄せ本格的な研究に着手している。2008年1月17日、池田先生に「名誉博士号」を授与した北中米最古の学府、創立470年の歴史を誇る中米ドミニカ共和国の国立「サントドミンゴ自治大学」のレイナ総長は語った。「なぜ池田先生に最高の栄誉を贈るのか。核兵器による脅威など、人類は、危機的状況に

さらされています。それは時代を経るごとに、ますます緊迫してきています。だから私たちは池田先生に榮譽を贈るのです。なぜなら、池田先生の思想を早急に実行していかなければならないことを世界に訴えたいからです」<sup>1)</sup>と。

こうした言葉に代表されるように、今、池田先生の平和思想は世界に広まり、多くの人々に受け入れられている。ここでは、池田先生の平和思想がどのように世界で受容されているのか、それはなぜなのか、そして、どのようなところで池田先生の平和思想が、人類の問題を解決する鍵となっているのか、こうした点に焦点をあてながら論を展開していくことにする。

## 2. 世界から評価される池田平和思想

今日、池田先生の平和思想は世界に広まり、世界から高い評価をえている。先生の業績は、これまでいかなる人もなしえなかったものであり、また、これからの時代においても再現が困難であろうといってもよい。ではその業績とは何か、主なものに限って4点指摘しておこう。

### 1) 仏教を世界 192 カ国・地域に流布

第1に、仏教を 192 カ国・地域に広めたことである。今日、宗教の分布を大まかな数字で指せば、キリスト教（カトリックとプロテスタント合わせて）が 20 億人、イスラム教が 13 億人、仏教は 6 億人といわれている。このうち、キリスト教やイスラム教が世界にほぼ満遍無く広まっているのに対し、仏教は偏りがある。アジアが中心なのである。もちろん仏教を研究したり、趣味で取り組んでいる人は世界にもいるが、生活の指針とし、真剣に信仰の対象として実践している人というに限られた数になってしまうであろう。池田先生は、この仏教を 192 カ国・地域に広め、しかも、それを単なる研究や趣味の対象としてではなく、生活の基盤とし、生きた宗教として、各地に定着させているのである。歴史上、かつてこれほどまで仏教が世界に広まった例はない。文字通りに仏教を「世界の宗教」と発展させたのである。

仏教は、生命論を基軸に、だれ人をも平等に扱っていく人間主義の教えである。それは、平和と文化を創造する源泉にもなる。平和と文化といっても、所詮は人間に帰着する。人間自身を磨き昇華させていく以外にない。池田先生は、この平和と文化の根元となる仏教を世界に広めた。それは、換言すれば、仏教の平和思想を、世界の人々に受け入れられるように、その教義を解釈し、再構築していったということである。世界の多くの人々は、池田先生の口から語られ、その行動で示される仏教の教えを見て、その真髄を理解したのである。池田先生なくしては、仏教がいかに深淵な教義を誇るといっても、世界 192 カ国・地域の人々に受容されることはなかったであろう。アメリカの著名な仏教研究者であるクラーク・ストランド氏は次のように断言している。

「歴史的に見ても、新しい宗教革命が起きる時は、その宗教が伝わる勢いは大変

なものがあります。理屈を超えて、人の心から心に伝わっていく。創価学会を研究してきて、おそらく500年、1000年に一度、誕生するかもしれないかの偉大な宗教であると確信します。今、その誕生に居合わせたことは、宗教研究者として大変に光栄なことです<sup>2)</sup>と。実に、500年か、1000年に一度誕生するかもしれないかの新しい宗教運動を台頭させ、その教義を世界に定着させている。逆に言えば、世界が池田先生の仏教に基づく平和思想を、今、人類を救済する知恵の源泉として真剣に求め、受けとめているといえるのである。

## 2) 230 をこえる名誉学術称号

第2に、230を超える名誉博士や名誉教授などの「名誉学術称号」を世界の大学や研究機関から授与されていることである(2008年6月現在)。いうまでもなく、「名誉学術称号」はその大学や研究機関が威信をかけて、今世界で最も影響力のある人物、高邁な理想と高潔な人格を持ち、研究、教育に最善の力を及ぼしていると判断した人に授与する最高の栄誉である<sup>3)</sup>。とくにこの称号は、授与された人も名誉だが、それ以上に、どのような人物に受けてもらったかという、授与する側にとっても誇りとなる問題なのである。したがって、授与する側としては、世界で活躍する人々を慎重に調査し、自分の大学や研究機関の設立の理念や建学の精神に合致する人を探して、授与するのである。その際とくに、世界的なビジョンを持ち、人類の行く末を指し示す理念を掲げながら、それを実践して人々に多くの影響を与えているということは、授与の際の重要な理由となる。池田先生は、この「名誉学術称号」を世界の230を超える大学などから授与をされているのである。

平均的に考えて、「名誉学術称号」は、どんなに突出した人物といえどもそれを授与されるのは生涯にひとつかふたつ。それが10にもなれば余程の人物ということになる。池田先生の場合は、それが230を優に超えている。このような人物は歴史上これまでにいかなかったし、これ以後も現れることはないのではないかとわれている。あまりの快挙に、人々はなんと表現したらよいのか、言葉を失っているというのが正直なところである。

とくに、授与にあたって特徴的なことが3点ある。第1に、授与している大学、研究機関が世界5大陸に及んでいるということである。どこか特定の国とか、固有の思想・信者を有する機関などに限定されていない。アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米、中近東、ロシア、中央アジアなどすべての地域にまたがっている。また、キリスト教、イスラム教、仏教、共産主義などあらゆる宗教・文明圏の国の大学・研究機関からの授与となっている。これは、池田先生の平和思想がそれだけ普遍的な広がりを持つものであり、すべての国や文化・文明・宗教を持つ人々から受け入れられているということを意味している。

第2に、名誉学術称号の内容が、人文科学、社会科学、自然科学など広範囲にわたっていることである。これは、池田先生の視野がいかに広いかを物語っている。

第3に、日本との関係が必ずしも好ましくない中国、韓国などからの顕彰が目立っていることである。それら2国の大学・研究機関からの「名誉学術称号」の授与

が極めて多い。アジア・太平洋戦争という過去の暗い歴史を引きずる日本とアジア諸国間の関係を考えると、これは実に不思議なことである。今もって対日感情が良くない中国、韓国という国の学術機関が、池田先生を高く評価するということは池田先生思想の中に、歴史の壁をこえたヒューマンイズムの精神が脈打っているということを物語っている。民族の相克を乗り越えて、たがいに共感しあう生命の共鳴盤が鳴り響いているといえよう。

2000年1月18日、池田先生に「名誉人文学博士号」を授与したニューヨーク市立大学・クイーンズ・カレッジのセソムズ学長は次のようにスピーチした。

「人間というものは、時として、まったく見知らぬ人でありながら、生涯を通してずっと知っていたかのような、なつかしさを感じる人との出会いに恵まれることがあります。一年近く前に池田大作博士にお会いし、まさに自分もそのような幸運な人間であることに気づきました。(中略)池田氏は、まさしく私がこれまで、『こうなりたい』と目標にしてきた人物像を、そのまま体現しておられます。(中略)詩人、外交官、学者、政治家、師匠、夫、父であり良心—池田大作氏は、これらのすべてを兼ね備えております。池田氏は、サムライの最良の伝統を受け継ぐ戦人(いくさびと)であります」<sup>4)</sup>と。池田先生が、世界の学術機関から称賛される理由を、端的にのべた言葉といえよう。多くの識者が、池田先生の平和思想はもとより、その核をなす人格のこのような面に賛同の念を隠しえないのである。

### 3) 550を超える名誉市民称号

第3に、世界の550を超える都市から「名誉市民」称号をえていることである。「名誉市民」称号の授与は、各都市によって条例または規程などに基づいて厳格に定められている。一般に、その市町村の住民や縁故者のうち、社会的に顕著な業績を挙げた者に与えられることが多いが、それ以外にも、世界平和や公共の福祉、文化の発展などに貢献した世界的な偉人に授与されることもある。いずれにせよ、その市町村が卓越した業績を挙げたと判断した人物に贈られるのが「名誉市民」称号である。池田先生は、この称号を世界の550を超える都市から授与され、顕彰されている。いかに池田先生の平和思想やその行動が、世界の多くの人々から受け入れられているかの証左といえよう。

いうまでもないことかもしれないが、「名誉学位」称号はひとつでさえ授与されることは稀なことであり、大変に名誉なことである。同じく「名誉市民」称号も通常はひとつ、あるいは多くても2、3の市町村から受けるというのが一般的である。それを、池田先生の場合は、550を超える世界の市町村から贈られ、しかもまだ続くことが予想されている。これは普通では考えられないことであり、池田先生の思想、行動、業績が、いかに卓越したものであるかを物語るものである。

これだけ世界の多くの都市から「名誉市民」の称号をえている池田先生の存在は、まさに「世界市民」といっても過言ではない。「地球市民」と称してもよいかもしれない。先生の思想は、国家や人種、民族の壁を超え、思想・信条・宗教の差を超越して、世界の文明と文明を結び合わせる普遍的な力を擁している。550を超

える「名誉市民」の称号の授与は、このことを端的に証明している。

#### 4) 世界に見られる池田大作研究所の設立

第4に、世界で20を超える池田先生思想・哲学を研究する「池田研究所」が大学や研究機関に設置されていることである。それは、中国、インド、アメリカ、デンマークなど世界のあらゆる方面に及んでいる。また、研究所や研究センターまでいなくても、大学の講義科目や研究会の主要テーマとして、池田先生思想や著作が取り上げられていることもある。

私は、1990(平成11)年12月10日、ケニア共和国のナイロビ市内で開催された「ケニア作家協会」の年次総会に出席した。その年の研究テーマは、まさに「池田大作氏の思想と哲学」であった。参加者は、ケニア共和国を代表する作家、学識者など40人ほどである。一人一人が池田先生の著作を一冊取り上げ、そこでのべられている先生の人間観、生命論、平和論などを自分なりに解釈し、論評していく。一人の発表が終わると、さっといっせいに手が挙がり、「あなたは今、池田先生の生命観について、そのような意見をのべられたが、そのとらえ方はまだ浅いのではないか。池田先生はこういっているのではないか」と堂々と反論をのべる。するとまたそれに対して別の見解が披露される。じつに、池田先生思想や哲学を少しでも掘り下げようと白熱した議論が展開されたのである。これが丸2日、10数時間に及んだ。私は、この光景をまのあたりにして、世界はこれほどまでに池田先生の哲学を求めているのかと驚嘆した次第である。

じつに、今日、世界で「池田研究所」が続々と開設されている理由は、池田先生思想・哲学・行動が、人類の危機を救う希望の光明であるという点から、人類の知的遺産としてそれを永遠に残すため、体系化をはかっていこうとするところにある。通常、人物研究は、現存している人に関してなされることはあまりない。むしろ死後、その評価をめぐって試みられることが多い。しかし、池田先生の場合は、現在も生成発展する先生思想・哲学をより正確に、より深く究明しようと本格的な研究がなされている。これは、いかに先生の業績が広く世界から受け入れられ、評価されているかの証拠である。

中国の「池田研究所」の研究員は、それぞれ池田研究に取り組んでいる理由を次のようにのべている<sup>5)</sup>。「池田先生思想は、今中国が必要としている調和社会の構築に必要なものです」(広西師範大学盧寧教授)。「仏教に基づく深い洞察力が魅力です。今後の池田研究は平和思想が中心になると思います」(武漢大学倪素香教授)。「池田先生の日中提言が国交正常化の原動力でした。中国人民は、最大の功労者は池田先生であることをよく知っております」(華中師範大学李俄憲教授)。このような問題意識をもって、中国をはじめ世界で「池田研究」が活発かつ、本格的に行われているのである。

以上、池田先生の平和思想が世界で受け入れられている実態を、4つの観点から考察してきた。いずれも、世界がいかに真剣に先生思想を求めているかの証左である。

### 3. なぜ評価されるのか

前章では、池田先生の平和思想が世界から高く評価され、地球的規模で受け入れられている実態について考察した。では次に、なぜこのように池田先生の平和思想が受容されているのか、その理由について考えてみよう。

#### 1) 思想—人間主義の哲学

第1に、池田先生の平和思想の根底をなす人間主義の哲学である。人間主義とは、仏教の根元をなす考え方であり、人間を超えて、神とか超越的な存在を崇高なものとして崇めることはしない。あくまで人間そのものを真正面から捉え、その尊厳性を認めていくのである。しかも、それは、人間中心主義の思想とは異なる。人間中心主義は人間を絶対視し、環境や他の生物を軽視する傾向があるのに対し、人間主義は、人間を重視しながらも、それは環境や他の生物との関係性の上に存在するものと位置付ける。主体と客体との相互依存性の上に生命体が立脚し、存在すると説く。幅広い生命観、全体感の上に立った人間の捉え方といえる。こうした人間の把握の上から人間を尊重していくのが人間主義であり、それは次の4つの考え方を内包している。

#### ①生命の本質論

仏教に基づく生命の本質論は、生命を物質とも精神とも断定しない。それらが一体不二として融合したものと捉える。それを存在論からいうと「空」という。「空」とは、あるといえばある、ないといえばない。しかし、本質的には存在するという考え方である。創価学会の戸田城聖第2代会長は、この問題をよく電波を例にたとえて説明された。すなわち、「この部屋に電波がある。しかし、見せてくれといっても見せることはできない。だから、ないのか、といえそうではない。ラジオやテレビの受信機を置けば、音声や画像が入る。すなわち、電波は存在するのである。このようにないといえばない。あるといえばある、という形態をとりながら、本質的には、厳然として存在している実態が生命である。この生命は大宇宙とともに存在しており、条件に応じて形をなして現れてくる。ゆえに、生命は広大無辺にして永遠の存在である」と。

人間主義は、こうした「空」の理論に基づく生命論に立脚している。これは、人間存在を表層的に把握するものではなく、宇宙や自然をも含む生命体そのものの上から根元的に捉える深遠な哲学的人間観である。

#### ②生命の尊厳論

上記の生命論から誕生してくる考えは、生命の尊厳論である。宇宙や自然とともに存在する生命は、消滅させようとしても本質的には決して消滅させることはできない。いな、消滅できないものを消滅させようとすることは最大の冒瀆となる。生

命原理そのものに反する行為になるからである。ここから逆に、生命は絶対的に尊厳であるとの考え方が出てくる。生命は存在自体が尊く、貴重なものである。人間の生命、自然、宇宙—これらのすべてを大切にしなければならない。生命の尊厳性を損なうことは、自然の摂理に逆らう最大の悪となる。

ここからでてくる考え方が、「一人の人を大切に」という思想である。どんな人であれ人間であるということは普遍の原理である。人種、民族、国籍、宗教、職業などによって、人間を差別することは許されない。すべて平等であり、対等な存在なのである。こうした捉え方をつきつめれば、結局は、どこまでも「一人の人を大切にしていける」ことが肝要となる。一人を尊敬し、励まし、勇気づけていくことが生命の尊厳性を守ることに他ならない。決して人間を数として捉え、物として把握することは認められないのである。

### ③非暴力主義

人間主義の思想は、絶対的な暴力否定の考え方の上に立脚する。非暴力思想こそがその核をなすのである。その理由は、上記にのべた生命の尊厳論から波及してくる。生命を絶対的に尊厳なものとして捉えるからには、それを損傷する暴力行為は断じて許されない。非暴力主義こそ人間主義の究極の理念である。暴力のない平和な社会の建設、暴力によらない問題解決の方法、これこそ人間主義の真髄をなす。

したがって、非暴力主義の具体的形をなすものは、言葉による意志の疎通であり、問題の解決である。それは、交渉であり、協議であり、討議である。結局は、対話ということになる。対話という話し合いによって認識を共有していく。差異を確認し合う。問題の解決をはかっていく。これが、理性を持つ人間としての最高の文明的行為であり、高尚な振る舞いなのである。言葉こそ人間の持つ唯一の平和的問題解決の方途といえよう。

### ④幸福論

上記の生命論、生命の尊厳論に基づいて、人間主義は、人間の真実の幸福のあり方を説く。まず、人生の目的は、幸福になることにあり、人間はそのためにも生まれてきたという。その幸福とは、自らの生命の充実感、生命を輝かすことにありと強調する。この点について、戸田城聖2代会長は、次のように指摘している。

「人間の幸福には、相対的なものと絶対的なものがある。相対的な幸福とは、お金がもうかった、名誉や地位を手に入れた、欲しいものが買えた、自分が美しくなった、というようなものである。これらは確かに人間の欲望や願望を満たすが、しかし、一時的なものに過ぎない。時がたてば、また次のものが欲しくなる。もしくは手に入れたものが消えていく。はかないものである。それに対して、絶対的幸福とは、生きていることが楽しくてしょうがない。一瞬一瞬、喜びが生命の底から彷彿として湧き起こってくる。本然的な生命の歓喜そのものを絶対的幸福という。人生の本当の幸福とは、この絶対的幸福感をえることにある」と。

物質的な幸福とか、名誉や地位を得たという満足感それ自体は否定すべきもので

はない。それらは、厳しい努力の末からえたものであろうし、尊いものであることに違いない。しかし、人生には、そうした面とともに、人間生命そのものが本能的に感じる喜びとか充実感がある。これは、社会的立場とか、地位とか、職業とかに関係なく、すべての人が感じる、発動する生命のリズムなのである。生命の赫たる完全燃焼といってよい。

人間主義の幸福論は、この絶対的幸福感を重視する。すべての人が、生命の喜びにあふれ、生きていることそれ自体に歓喜と充実を感じることを本源的幸福とする。人間は本来幸福になるために生まれてきたのである。政治、経済、文化、教育などすべての営為はそのために存在する。

人間主義の哲学は以上のような構造を内包しているが、一点つけ加えれば、それは人間がいかなるイデオロギー、原理、原則に対しても従属するものではなく、人間があくまでも主役であるということを位置付けているのである<sup>6)</sup>。イデオロギー、原理、原則はあくまでも人間のためにあるのであってその逆ではない。かつての歴史を見ると、いかに人間がイデオロギー、原理、原則のために犠牲になってきたかがわかる。とくに宗教にあっては同じことがいえる。宗教も人間のためにあるのであって、宗教のために人間があるのではない。池田先生の平和思想の核をなす人間主義とは、このように人間をイデオロギー、原理、原則の中心にすえ、決してその従属物と思っていない点に特徴がある。イデオロギー、原理、原則そして宗教などは、すべて人間性の向上、平和と幸福のためにあるというのが人間主義の核心なのである。池田先生の平和思想は、この一点があったからこそ普遍的に受容されてきた、といえよう。

## 2) 識見と人格

池田先生の平和思想が世界に広く受容されている第2の理由としてあげられるのが、池田先生の卓越した識見と高潔な人格である。その源となっているのが、前述した人間主義の哲学であることはいうまでもない。豊かな教養と一人の人を思いやる慈悲の心からほとばしる池田先生の卓越した識見と高潔な人格は多くの人々を魅了してやまない。とくに、池田先生と個人的に会見した7000人を超える世界の多くの政治家、学識者、文化人らは、皆一様に、池田先生という人物を高く評価するのである。

### ① 識見

では、その卓越した識見を示す歴史的な場面のいくつかを紹介し、検証してみることになろう。ちなみに、ここでいう識見とは、全体の状況を把握し、そこから物事の本質を見抜いていく力である。

1961(昭和36)年8月13日、池田先生は東西対立が先鋭化した象徴ともいうべき「ベルリンの壁」の前に立った。壁が作られた56日後であった。同じ民族がイデオロギーの対立によって引き裂かれ、分断されている姿をみて先生は怒りの声を発した。このようなことが許されてよいはずがない。人間はすべて同じ人間ではな



いか。イデオロギーや、東西対立という政治的魔性が人間性を引き裂くことは許されない。これこそ人間の悪業ともいえる。壁をつくったのは人間であり、東西の対立といっても人間の心に巣くう権力の魔性のもたらしたものである。池田先生はこうした人間観から、人間の心の中に平和の大光がさせば、この壁は必ず取り壊されると確信した。そして、ブランデンブルグ門を仰ぎながら、「30年後には、きっと、このベルリンの壁は取り払われているだろう…」と強い口調でいった。事実その壁は、それから28年後に撤去されたのである<sup>7)</sup>。

池田先生の叫びは、単に未来を予測したのでもなければ、願望を語ったものでもない。それは、先生の卓越した識見のうえから、やがて、必ず、平和を希求する人間の良心と英知と勇気が勝利することを見抜いた発言であった。

こうした池田先生の国際政治観は、1990年以降アメリカで台頭してきたコンストラクティヴィズム (constructivism) に通じるといえよう。それは、国際政治を楽観視するものでもなく悲観視するものでもない。国際政治を動かす要因を人間の理念、意志、文化、アイデンティティなどに求め、人間の主体的契機を重視する見方である。池田先生は、人間があくまですべての現象の中心であり、人間の意思によってもたらされたものは、人間自身の変革によって、善なるものへと転換できると見ていく。イデオロギーや政治経済構造よりも、人間を軸にすえた視座といえよう。こうした人間主義史観で、池田先生は東西のあらゆる要人と政治的対話を続けていった。

1974年9月17日のことである<sup>8)</sup>。池田先生は、ソ連のクレムリン宮殿で当時のコスイギン首相と会見した。東西対立の激しい時代である。70歳のソ連で最も有能で、最も洗練された指導者といわれた首相が、大上段に池田先生に鋭い詰問を浴びせてきた。「あなたの根本的なイデオロギーは何か」と。東西対立の冷戦構造が激しい時、ソ連まで来る池田先生は、「共産主義イデオロギー」を信奉するものか、それとも「資本主義者」なのか、どちらなのか吟味しようというのである。それに対し46歳の池田先生は、間髪を入れず答えた。「私のイデオロギーは、平和主義であり、文化主義であり、教育主義です。その根底は人間主義です」と。それを聞いたコスイギン首相は思わず、「私も全く同感です」ともらしてしまった。池田先生のイデオロギーの対立を超えた、高次元からの高邁な発想に練達の首相も思わず引き込まれてしまったのである。

その夜、執務を終えて帰宅した首相は、息女グビリャーニ・コイスイギナに話したという。「今日は、非凡で、非常に興味深い日本人に会ってきた。大変複雑な問題に触れながらも、話がすっきりできてうれしかった」と。そして、1975年5月、2度目の池田先生との会見の最後、コスイギン首相は「私は池田先生に会えてよかった」、「どんな障害が生じて、池田会長がいるかぎり、ソ日の友好は崩れないでしょう」と強調したのである。

池田先生の人間主義に基づく外交的知見は西側の政治指導者にも大きな影響を与えた。その一人がアメリカの元国務長官キッシンジャーである。池田先生がイデオロギーの壁を超えて、ソ連、中国を往来し、キューバとの友好すら深めていこうと

するその卓見と行動力にキッシンジャーは驚嘆した。キッシンジャーの外交は、人間主義とは異なり、19世紀のヨーロッパ外交を手本に「力の均衡（バランス）」をはかることによって国家間の安定と平和をもたらそうとするものであった。そこには、現実主義的な国際政治観が働いており、計略と策謀による安全保障の創出こそが平和であるという考え方が主軸をなしていた。

池田先生の考え方は、こうしたものとは全く異質で、人間を信頼し、その友好と信義のうえに国家間関係も成り立つとの信念で各国の政治指導者と誠実な友情を深めてきた。その結果、中国ともソ連とも、そしてアメリカが苦手とするキューバとも緊密な友好交流の道を拓いたのである。

こうした池田先生の人間外交を目のあたりにしたキッシンジャーは、自分にはない外交能力をもつ池田先生に大きな魅力を懷き、先生との人間関係を強く深めていく。池田先生とキッシンジャーは、1975年1月13日、初めて対談してから意気投合し、以来2人の出会いは8回に及び、対談集の出版ともなった。1986年9月には、2人の対話は1日で話が終わらず、2日間で計6時間にも及んだ。

権力外交を志向し、勢力の均衡によって平和と安定をはかろうとするキッシンジャーと人間外交を基本とする池田先生とは、外交の方法論が全く違うのではないかという気がするかもしれない。両者は水と油の関係なのでないかと危惧する声もあった。しかし、池田先生の人間外交に、キッシンジャーの力の外交は大きく包み込まれ、キッシンジャーは池田先生の人間を視点においた物の見方に魅力を禁じえなかったのである。

1987年9月、創価大学で行われた東京・足立区の創価学会青年部の文化祭にキッシンジャーは出席した。フィナーレの後、池田先生は青年たちに、「創価大学に『周恩来桜』と並んで『キッシンジャー桜』を植えたいが、どうだろう」と呼びかけた。それを聞いたキッシンジャーは心の底から感動した。自分が生命をかけて手がけてきた米中接近の花が、今このような形で、桜花の結晶となって結実してゆくとは予想もしていなかったからである<sup>9)</sup>。

池田先生のコスイギン首相をはじめソ連・東側の指導者に対する発言と、アメリカ・西側の指導者たちに対する意見とは全く違ってはいない。1978（昭和53）年1月12日、東京で、ケネディ元アメリカ大統領の弟エドワード・ケネディ上院議員と会見した池田先生は次のように語った<sup>10)</sup>。

「どの国であれ、民衆の精神面を開拓しなければ、その分、政治の圧迫が比重を占めてしまいます。大事なものは、人間的価値観です。国際社会にも多くの課題があることは当然です。しかし、ソ連も人間です。中国も人間です。『人類は、ひとつの共同体である』との国際世論を高めていくべきです。そこに明確な目標を定めて、挑戦していただきたいのです」。

ケネディはこの発言に対して大きくうなずき次のように答えた。

「わかりました。アメリカ人も、中国人も、『家族を大切にする』ことは同じですから。私は思います。人々が互いに理解し合うには『まず自分が人間的行動を起こす』ことだと。私は池田会長の思想に賛同します。復帰すべきところは『人間』で

す。『人間に返れ』です」と。

イデオロギーでも特定の主義でもない。何よりもまず人間が根本であり、人間が基軸である。この考えのもと世界のあらゆる識者と対話を重ねる池田先生の姿に、多くの人々は心からの賛意を表明した。じつに、先生の卓越した識見が、世界に受け入れられている証左といえよう。しかも、先生の卓見は、こうした世界の識者との対話の中にだけ輝いている物ではない。一庶民、一介の学生たちとの語らいにおいても鋭い閃光を放っているのである。たとえば、私には未だに耳朶に焼き付いて離れない次のような言葉がある。

第1に、1968(昭和43)年夏のことである。20世紀からあと30年ほどで21世紀になろうとする頃、そろそろ20世紀を総括し、21世紀をいかに展望するかが世上の話題になり始めていた。私もまた21世紀をいかなる世紀にするかなどとの青くさい議論を重ねていた。そのような時、池田先生は次のようにいわれた。「21世紀は生命の世紀になる。あらゆる観点から生命というものが見直され、問い直されるようになる。そして、生命を最も尊重しなければならない時代になる」と。私はこの話を聞いた時、何か時代の動向が開かれた思いがした。人類の進むべきのが絞られたような気がしたのである。生命科学などの分野が脚光を浴びはじめたのは、それからしばらくしてからであった。

第2に、1960年代末から1970年代初めにかけて、世界的に学生運動が火を吹いた時のことである。私たち学生は、そうした時代の波に洗われて、ややもするとその運動に身を投じ、何かをしなければと決起にはやろうとした。そのようなある日、池田先生は私たちに静かに語られた。「今の学生たちの気持ちはわかる。しかし、その乱暴な運動に加わることは、“はしか”にかかるようなものである。一度はかかる病気なのだ。このように本質をしっかりと見極め、決して付和雷同したり、便乗したりしてはいけない。特に革命家を気取って暴力行為に走ったり、一般市民に迷惑をかけるような行動は慎まなければならない。民衆を味方にし、庶民から共感をえられるような運動でなければ、真の学生運動とはいえない。何よりも人間主義の哲学に立脚した運動でなければ、底の浅い学生運動で終わってしまうものだ」と。この話の半年もしないうちに、学生運動は火が消えたように沈静化してしまったのである。

第3に、1970(昭和40)年の夏の一夕のことである。学生と懇談していた池田先生は、次のように将来の助言をされた。「これからはコンピューターと語学の時代、特に英語の時代になる。この2つはあくまで手段であり、技術に過ぎない。それ自体目的ではない。その根底には哲学がなければならない。人間や時代の本質を掘り下げた確固たる哲学を有していることが人間として必要なことである。すなわち、換言すれば、しっかりした哲学をもち、その上で語学とコンピューターを駆使して仕事や学問に挑戦していくことが肝要である」と。40年前の発言ではあるが、その輝きは未だに色を失っていない。

第4に、1972(昭和47)年11月のことである。開学2年目の創価大学で第2回創大祭が開催された。学生の激励に来られた創立者池田先生は、学生の展示をひと

つひとつ丁寧に御覧になりながら、学生たちにコメントを寄せられた。ある部屋で生命哲学研究会というサークルが、「世界の宗教」という展示を行っていた。それを見られた先生は「イスラム教か。21世紀はイスラム教が大きな影響力を持つ時代になると思う。僕も今、この宗教のことを真剣に研究しているところです」といわれた。

当時、イスラム教のことは多くの日本人はもとより、欧米でもあまり注目していなかった。イスラム教自身にも問題となるような動きは見られなかった。何よりも宗教以上に資本主義か、共産主義かというイデオロギーの対立の方が世界の関心を引いていた。そのような時、池田先生はすでにイスラム教の台頭を予想し、21世紀はイデオロギーではなく、宗教の対立が問題の争点になると見越しておられたのである。

これらは私が直接池田先生から伺った話であるが、今日あらためて時代を振り返ってみると、先生の指摘された卓見にあらためて驚嘆せざるをえないというの実感である。こうした卓越した先生の識見に加え、次に、その高潔な人格について触れることにする。

## ②人 格

池田先生の高潔な人格とは、何も特別の行動や振る舞いの中にあるのではない。ごく普通の、人間としての自然の所作の中にそれは表出される。一言にしていえば「一人の人を大切にする」という言動である。それを裏付けるいくつかのエピソードを紹介しよう。

1960（昭和35）年10月、創価学会の第3代会長に就任して5ヵ月後、池田先生は早くも世界への平和旅にたたれた。その第一歩は、太平洋戦争勃発の地となったハワイ島であった。最も辛酸をなめた地に深く太い平和の楔を打っておきたいというのが池田先生の考えであった。その地で行ったのは座談会であり、質問会であった。一人一人の率直な悩み、疑問を池田先生は真正面から受けとめ真摯に答えていった。話し始めたのは、若い婦人であった。彼女はいわゆる戦争花嫁として、朝鮮戦争で来日したアメリカの兵士と結婚し、夫の郷里であるハワイへ来たのだった。ところが、そこは楽園ではなく、言葉や文化の違い、貧困、夫の暴力…。かといって今更、自分の故郷東北には戻るわけにはいかない。彼女はほとんど生きる力を失い、やっとの思いでその夜の会合に出席したのである。

池田先生は渾身の力を込めて、その婦人を激励した<sup>11)</sup>。「毎日、苦しい思いをしてきたんですね。辛かったですよ。（中略）しかし信心というのは生き抜く力なんですよ。（中略）日本に帰れば、幸せが待っているというのでもありません」と婦人の立場に寄りそうように同苦する。そして「強く、明るく生きることです。一日も早く英語をマスターして誰とでも意志の疎通を図れるように努力してください」と今後の努力の方向を示す。最後は、強く明るく生きぬくこと、「あなたが幸せになることは、あなた一人の問題にとどまらず、このハワイの全日本人女性を蘇生させていくことになるんです」と心からの励ましを惜しまない。それはまさに宿

命を使命に転換させる一人の人間の蘇生のドラマである。

池田先生の平和旅は、生きる希望を失い、人生の悲哀に打ちひしがれた一人の女性に勇気の灯をともしるところから始まった。「それは、およそ世界の平和とはほど遠い、微細なことのようには思えるかもしれない。しかし、平和の原点は、どこまでも人間にある。一人ひとりの人間の蘇生と歓喜なくして、真実の平和はないことを<sup>12)</sup>」先生は知悉していた。一人の人を大切にすること。ここに平和感覚の原点があることを先生は教えてくださっているのである。

国際的な歌手で、日本ユニセフ協会大使として、世界の子どもたちの現状を伝えるアグネス・チャンと池田先生との出会いについてもひとつのドラマがある<sup>13)</sup>。1973(昭和48)年12月5日、二人はある雑誌の企画「芸能界のホープが各界の著名人を訪問」で邂逅した。池田先生はニコニコして、アグネス・チャンに云った。「紅白歌合戦の初出場おめでとう」と。彼女は「ありがとうございます」と応じる。「大学生なんだね」と先生。「はい。上智大学の1年生です。大学は卒業するつもりです」と彼女は答えた。そのとき先生は、間髪を入れず力説した。「そう。勉強が一番、大切です。人生の根本だから」と。そのうえでつけ加えた。「それから皆のために歌ってください。歌で世界中の人が仲良くなれます。そして、健康には気をつけて!」と。

この言葉を聞いた時、アグネス・チャンの悩みは一ぺんに氷解した。彼女は中学1年の時からボランティア活動として歌い始めていた。歌で人の力になりたい。でも思う存分勉強もしたい。厳格な父は、大学でしっかり勉強しなさいという。気丈な母は、歌手として世の中で活躍を…とせまった。勉強か、歌かの狭間で彼女は答えに窮していたのである。

どちらを選ぶべきか、そんなアグネス・チャンに池田先生の話は明快であった。「勉強は大切」。そのうえで「歌で平和を」と。彼女は瞬間、「そうか両方やってもいいんだ。勉強と歌と…」と。眼前が開けた。以来、迷いはなくなり、歌手として大成すると同時に、1994年、アメリカのスタンフォード大学で教育博士号を取得したのである。

どんな人の悩みも池田先生の答えは鋭く、深い。その対話の妙によって啓発を受ける機会はあまりにも多い。2002(平成14)年1月、会見した駐日ウクライナ大使ユリ・コステンコは次のように感嘆した<sup>14)</sup>。

「池田先生の深い思想に触れて、私たち夫婦は本当に感動しています。一文一文に感じるところがあります。「あー、わかってみれば簡単なことじゃないか! 自分は何を、こんなに迷っていたのだろう!」と思ったり、『自分が言いたかったこと、見つけたかったことを、池田先生が見事に表現してくださっている』と。

また、2001(平成13)年12月、池田先生に「名誉教授」称号を授与した韓国慶州大学の創立者金一潤博士は次のように強調した<sup>15)</sup>。

「池田博士に出会えたことだけで、人生の90%以上は、すでに成功したと、私は申し上げたい。(中略)人は、どんな人と会うかによって人生が変わります。(中略)池田博士に出会えたことは、私にとって、今まで見たことのなかった、新しい『希

望の光」を見るような心情であります」と。

池田先生と会見して、このような感想を懐く人はあまりにも多い。皆、先生の大きな懐にいだかれ、先生の人格に魅了されてしまうといつてよいであろう。そのほとばしり出る高潔な人格の淵源はどこにあるのであろうか。ある財界の人が次のように尋ねた<sup>16)</sup>。「池田先生は、世界を回り、各界の幅広い人たちと交流を広げているが、いつも心がけている点は何でしょうか」と。それに対して、先生は躊躇なく次のように答えられた。「世界には、いろいろな方がいます。各国の元首のような立場の人々、博識な学者、あるいは巨億の富を手に入れている人等々。まさに十人十色です。しかし、いかに権力や富、学識などをもった人でも、必ず抱えているのが“生老病死”の次元での悩みや課題です。これだけは逃れようにも避けようにもどうしようもないものです。いっさいをはぎ取った、その『心』と対話するように努めています」と。

権力でも名誉でも地位でもない。すべてを除去してしまえば、人間はすべて同じである。悩める一個の生命体なのである。池田先生は決して人を地位や立場、肩書などで判断しない。いわば一国の大統領と語る時も、一庶民と語る時も、目線はいつも同じである。そこに立場、地位、肩書きを超えて、多くの人々が集まる理由がある。信頼と共感を寄せる秘訣が存在する。池田先生の高潔な人格の源泉—それはまさに「一人の人を大切に」という普遍的人類愛なのである。

### 3) 教育・文化交流の推進

池田先生の平和思想が世界に受け入れられている理由の第3に挙げられるのが、幅広い教育・文化交流の推進である。

平和の創出といった場合、そこには2つの面からの方法がある。ひとつは、軍事力を軸にした安全保障の達成という方法であり、これには、古典的な勢力均衡の方式、同盟関係の強化という方途、そして国際組織の構築という試みなどがある。近年では、「民主主義による平和（デモクラティック・ピース）」というような理念と政治制度の形態による平和創出論などが脚光を浴びている。いづれにせよ、これらによる平和創出の方法は、何らかの形で軍事力や武力というものを背後に秘めてのもので、ハード・パワーによる平和創出という性格が強い。これに対して、もう一つの方法は、いわばソフト・パワー、文化の力による平和創出というものである。軍事力や武力による力の均衡に基づく安全保障という意味での平和を創出するのではなく、教育や文化の交流によって人々の間に相互理解と信頼、協調の心を生み出すことによって、平和を育もうとするものである。一般に平和の創出といった場合、この2つの面からの方法が重要で、どちらか一方に偏るのではなく、両者の調和をはかっていくことが肝要である。

池田先生の第1の方法による平和創出のあり方に対する提言は、毎年「1・26記念提言」で明確である。よってここでは、第2の方法によるものを概観しておきたい。池田先生の信念には平和といっても、世界の人々の心の中に、同じ人間であるとの同胞意識と相互理解の根がなければ、それは、脆弱なもので終わってしまう

との認識がある。では、そのためには何をすればよいのか。先生の結論は明快である。教育と文化の交流によって、世界の人々の心の中に、相互理解と相互信頼の輪を広げていこうとするものである。

この信念のもと、池田先生は創価大学をはじめとする数多くの教育機関を設立され、また、民主音楽協会や富士美術館、東京富士美術館などの文化施設を創設した。それらは現在、世界の多くの大学や文化、芸術団体・機関と活発な交流を重ねている。

たとえば、創価大学は、中国やロシア（旧ソ連）の大学との交流において目ざましい成果をあげている。1972（昭和47）年、日中国交正常化がはかられて間もなく、中国はこれからの日中交流の強化をはかるために、留学生を日本に送りたいと要請してきた。しかし日本の主な大学は、いずれもまだ準備が整っていないからとの理由で受け入れを拒否した。困った中国側は、池田先生に相談した。先生は、その話を聞くや即座に「創価大学でお引き受けいたしましょう。私が留学生の身元保証人になります」と答えられた。こうして1975（昭和50）年4月7日、中国から公式の6名の留学生が創価大学に入学した。

池田先生は、その6名の留学生に対し、大学に来られるたびに会い、懇談し、激励された。時には食事を共にすることもあった。しかも、先生は中国の留学生を励ますだけでなく、受け入れる創大側の学生にも、日中友好の意義を語り、留学の意味を説いた。両国の学生同士が真の友情を育めるようにきめの細かい配慮の手をさしのべたのである。このように池田先生の日中交流にかける意志は強く、しかもその作業はまさに手づくりであった。かくして創大で学んだその6名は、今日では、外交の分野をはじめ各界でも活躍している。また、中国の多くの大学が、池田先生に「名誉学術称号」を贈ったり、「池田研究所」を設置して、先生の思想、哲学、業績の本格的研究に取り組んでいる。

ロシアとの交流は旧ソ連時代から始まっており、モスクワ大学をはじめ、多くの研究・学術機関との交流を重ねている。池田先生自ら何回もロシア（旧ソ連を含む）を訪問され、とくに、ゴルバチョフソ連大統領や歴代のモスクワ大学総長とは対談集を出版するまでになっている。そこでは、文化・学術をはじめ、世界や人間のあり方までが縦横無尽に論じられている。中国の場合と同じく、ロシアから創価大学で学んだ留学生の多くも、日ロ友好のために活躍する人材となって巣立っており、創大との交流は着実にその実績をあげている。モスクワ大学の留学生で、後に、駐日ロシア大使館公使になったヤゴージン氏は「池田先生の功績は、日ロ間の架橋をする多くの人材を育成し、残したことです」といっている<sup>17)</sup>。

教育交流といっても、通り一辺のもので終わってしまう場合が多いが、池田先生については、それは決して表面的なものでは終わらない。ここまで手を打つのかと思わせるほど、相手の懐深く入り、心情を捉え、友好の絆を強めていく。その振る舞いや行動に多くの関係者は感動し、先生の教育交流に高い高い評価を与えているのである。

これは、文化交流についても同じである。例えば、民主音楽協会（民音）も世界

と幅広い交流を展開している。民音は2008（平成20）年10月で創立45周年を迎える。創立者池田先生が、1961（昭和36）年、タイで設立構想を表明し、1963（昭和38）年10月18日、東京・文京公会堂での記念演奏会で産声をあげた。芸術・文化・音楽を通しての人間と人間の交流による相互理解こそが世界平和の基盤であるというのが池田先生の信念であり、理念である。民音は、以来、先生のこの考えのもと、国境・民族・時代を超えて、音楽と文化の力で人々の心を結んできた。そして、発足45周年の佳節に、創立以来の海外交流国が100カ国・地域を数えることになった。じつに、世界でも特筆すべき、民衆に支えられた音楽文化団体として民音は多角的活動を展開しているのである。

とくに、日本になじみの薄い国々の文化交流にも力を入れている。日本は、どうしても欧米やアジアとの交流に傾きがちで、中南米・中東・アフリカ・中央アジアとの関係は疎遠になりがちである。国民も一般にそうした国々や地域に対してはあまり関心を払わない。しかし、池田先生は、世界のすべての国々・地域に対して理解を示し、関心を広げられている。とくに、その国や地域の人々の生き方、文化を尊敬し敬意を表される。民音は、こうした先生の幅広い文化理解の構想に立脚して、活発な交流を展開している。多くの人々の心の中に相互信頼の根を植え付けている。なお、ここでは詳細に触れないが、富士美術館も、美術を通して、世界の人々の心を結びつけているのである。

世界の多くの人々が、池田先生の平和思想を受け入れ、評価している第3番目の理由は、このような幅広い教育・文化交流の実績、業績にある。教育や文化は、その国や民族のアイデンティティ、主体性と強く結び付いている。普遍性をもつと同時に微妙な排他性をも有している。したがって、教育や文化交流は口で言うほど易しいものではない。きめの細かい配慮と注意が必要であり、何よりも忍耐力と強い実行力が要請される。池田先生はこうした繊細な性格をもつ教育・文化交流を真摯に着実に推進している。それが軍事力による安全保障という側面とは別の次元で、平和を強固ならしめるものであるとの信念に基づいて……。

#### 4. 対話を武器とする民間外交の展開

池田先生は、政治家でも外交官でも国際機関の役人でもない。一介の民間人である。宗教者であり、詩人であり、文筆家で写真家でもある。その立場から政党をつくり、大学をはじめとする教育機関や文化・芸術団体を創設した。その存在と影響力があまりにも大きいため、公人としての性格はあるかもしれないが、本質は職業的な政治家や外交官ではない。あくまでも一人の民間人といってよい。

しかし、池田先生は、公的には何の権力もない民間人ではあるが、世界のあらゆる階層の人々と会い、話し、民間外交を展開してきた。その武器はただひとつ、言葉であり対話である。すなわち、池田先生は、対話を唯一の武器として、幅広い民間外交を推進し、国際社会の趨勢に少なからぬ影響を与えてきたのである。それは人間外交といってもよい。以下その外交の一端を見てみよう。



### 1) 大国間の融和の推進

池田先生が創価学会の会長に就任し、世界を舞台に活動を展開しはじめた1960、70年代は、世界は東西冷戦の渦中にあった。しかも、米ソの対立に加えて、同じ社会主義国同士である中ソの確執も国際情勢に暗い影を落としていた。米ソ、米中、中ソ、という3大国が、3つの不気味な緊張状態にあり、一歩間違えば核戦争の勃発といっても誇張でない状況にあった。そのような状態にありながら、国際構造は、米ソの激しい対立から、中ソの相克に少しずつ移行し、かわって米中接近という流れが見えはじめていた。換言すると、中ソの対立が激しく、米中が近づき、ソ連対アメリカ、中国という構図が浮上してきたのである。とくに、中ソの対立を緩和させるということが、国際社会の大きな課題になっていた。

こうした状況下にあつて、池田先生の行動は、政治の表面には出ないが静かに異彩を放った。それは、緊張状態にあった大国間の融和をはかったのである。

1974(昭和49)年5～6月、池田先生は初めて中国を訪問し、中国の実情をつぶさに視察した。そこで痛感したことは、中国は長い歴史の停滞から脱却し、今新中国の建設に燃えているという息吹であり、中国の政治指導者も国民も戦争など望んでおらず、平和な国際環境の構築こそが彼らの願望であるということであった。とくに、中国は、その歴史において、わずかの例を除いて、自らが先に他国に攻めいったということはない。こうした点から、先生は、中国にはソ連を攻める意図はないと感じ、このような中国の実情、とくに民衆の素朴な平和を願う心情をぜひソ連の首脳部に伝える必要があると確信した。

同年9月8日、池田先生は初訪ソし、9月17日、コスイギン首相と会見した<sup>18)</sup>。話題は中国問題にも及び、先生は首相に率直に聞いた。「中国はソ連の出方を気にしています。ソ連は中国を攻めるつもりがあるのですか」。首相は答えた。「中国を攻撃するつもりも、孤立化させるつもりもありません」。それを中国の首脳に、「そのまま伝えてよろしいですか」。「結構です。伝えてください」。政治家ではない民間人ならではの飾らない対話でソ連側の本音を聞き出した池田先生は、同年12月の第2次訪中の際、コスイギン首相の言葉をそのまま中国側に伝えた。そして、同月5日、池田先生は周恩来総理と会見した。周総理は病の身をおして、池田先生に語った<sup>19)</sup>。「20世紀の最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。すべての国が平等な立場で助け合わなければなりません」と。その上で総理は、残された四半世紀で、アジアと世界の平和へ確固たるルールを敷きたい、そして21世紀の中日の友好を断じて成し遂げて欲しい、と望まれたのである。

中ソ間のこのような橋渡しをしたあと、池田先生は、翌1975(昭和50)年1月13日、ワシントンの国務省で、アメリカのキッシンジャー国務長官と会見した<sup>20)</sup>。キッシンジャーは米中国交、米ソのデタント(緊張緩和)、中東での往復外交の成功、ベトナム戦争の和平協定などを成就し、世界の流れを平和の方向に変えていた。そのため、キッシンジャーの立場からしても、中ソ間の平和をもたらそうとする池田先生の行動には異論はなかった。むしろ、中ソ間の緊張緩和は、キッシンジャーの手の及ぶところではなく、池田先生がその間隙を埋めたといってもよかつ

た。

このように、1974年に池田先生は中国、ソ連を相次いで訪問し、1975年初頭にはアメリカを訪れた。わずか半年の間に、中国、ソ連、アメリカの首脳と話し合い、3国の政治指導者はともに、それぞれの立場から平和を望んでいることを確認し、この共通の思いを、池田先生は、自らの立場から結び合わせることに成功したのである。じつに、池田先生の民間外交は、冷戦構造の中であって、米中ソが複雑にからみあう構図を背景に、大国間の融和を推進する役割を果たした。当時、このようなダイナミックな行動をした人は誰もいなかった。平和学の泰斗ヨハン・ガルトゥングは云った。「広い意味での冷戦構造を崩壊させたのは池田先生です」と<sup>21)</sup>。

## 2) 歴史認識の壁を超えて

日本外交にとっての最大の課題は、隣国である中国と韓国の間にある厚い壁を乗り越えられないことであった。人口13億をかかえる大国・中国、日本と最も隣接し文化も共有していることが多い韓国。この両国との真の友好なくして日本の安定と繁栄、ひいてはアジアの平和はない。日本の安定にとっても、アジアの平和にとっても、日中間の三国間の友好関係の樹立は不可欠の問題である。それを邪魔しているのが、過去の戦争体験の記憶と歴史認識の問題である。日本政府や、一部の日本国民は、当時の国際情勢や自民族の誇りから、中国や韓国に対しても依然として高圧的態度を採り、両国に屈するようなことは回避している。それが、両国の日本に対する不信や怒りとなって、3国間の心からの友好交流は困難になっている。未だに日中と日韓の間には、ギクシャクしたものが残っているのである。

こうした状況にあって池田先生の態度は明快である。中国や韓国は日本にとって文化の大恩人である。仏教、儒教をはじめ多くの思想、学問、文化、芸術、そして政治制度などは両国から学んだ。日本から留学生として両国へ学びに行った人は多いし、また、渡来人として、それらの国の人が日本に来て、日本に住みついた例も数知れない。古来から、日中韓の文化交流は行われていたのである。こうした中で、日本にとって中国、韓国は文化の大恩人であることに変わりなく、この恩を日本は絶対に忘れてはならない。日本にとって、中国、韓国は師匠の国であり、兄ともいえる存在である。その大恩ある国々の信義を日本の軍国主義政府は踏みにじったのである。この蛮行は決して許せるものではない。日本は、中国、韓国に対して、心からの信頼と友情の誠を尽くしていかなくてはならない。大要これが池田先生の心情であり、中国と韓国に対する態度の基本理念である。これに、人間主義の哲理が重なり、誠実な姿勢で、両国に対するという行動や振舞いが生まれてきているのである。以下、中国と韓国の場合を具体的に見ていくことにする。

1) 中国 1968(昭和43)年9月8日、池田先生は第11回学生部総会で歴史的な日中国交回復提言を行った。そこでの主張は、①中国政府の存在を正式に認めること。②中国の国連における正当な席を用意し、国際的な討議の場に登場してもらうこと。③日中は広く経済的、文化的な交流を推進すること。であった<sup>22)</sup>。当時、

日本政府を初め、多くの国民は台湾政府を唯一の合法的な国家として認めており、中国を正式に国際社会における国家として承認することに抵抗があった。とくに、冷戦構造の中で、共産主義国を標榜する中国には敵意や反感すら覚える人たちが多かった。その状況下で、池田先生は、私は共産主義に同調するから中国を承認せよというのではない。むしろ毛沢東主義の本質は民族主義であり、広大な国土を擁する中国を統一し、発展させようとするナショナリズムにも近い。こうした中国人民の心情を理解するとともに、地球民族主義といううえから7億1千万(当時)の人々をかかえ、三千年以上の歴史をもった民族・中国を無視することはあまりに不自然である、と訴えたのである。アジアの繁栄と世界平和のためにも、日中国交回復を果たし、中国を国際社会における正統な政府と認めることを強く進言したのが、池田先生の提言であった。

この先生の発言は当時大きな反響を呼び、ニュースのトップを飾るとともに、各界に大きな反響を呼び起こした。ある人たちは提言に反対の論陣を張り、ある人々は心からの賛同の声を寄せた。中でも、長年、日中国交回復を願い、行動してきた中国文学研究者竹内好は、月刊誌『潮』に「光はあったのだ」との評論を寄せ、感動を記した。そして、「徳、孫ならず。仁人は稀であるが、天下に皆無ではない」と絶賛した。「ここに先憂の士」がいたのである<sup>23)</sup>。

とくに中国側がこれを見落とすはずはなかった。情報を把握した中国の周恩来総理は、池田先生と創価学会に深い関心を示し、日中友好の橋渡しとしての役割を付与した。一方、池田先生は、具体的にその任務を遂行するにあたっては政治次元の問題なので、公明党に託した。公明党は自民党政府と中国側との仲介の労をとり、1972(昭和49)年9月29日、日中国交正常化が実現するにいたったのである。池田先生の日中国交正常化提言から4年後に正常化は実現した。それは異例の早さといってもよかった。国際情勢の動きがあったとはいえ、池田先生の日中国交回復に果たした役割が無視できないものであったことはいうまでもない。中国側の各界の人々は、今でも口をそろえていう。たとえば、2008(平成20)年5月8日、池田先生と会見した中国・胡錦濤国家主席は、次のようにのべた。「長期にわたって(池田先生は)中日友好に尽力された。数年前の日中が困難な状況にあるなかで政治的な難局を打開するために重要な役割を果たされた。心から感謝申し上げる<sup>24)</sup>」と。じつに、日中友好に果たした池田先生の民間外交の力は大きく、それは燦然と今日光を放っているのである。

2) 韓国 1998(平成10)年5月、池田先生は韓国ソウルにある名門慶熙キョンヒ大学から名誉哲学博士の学位を授与された。翌1999(平成11)年5月には、同じく同国の国立済州大学から名誉博士号を贈られた。以後、韓国の大学から続々と先生に名誉学位が贈られることになった。

韓国といえば、日本の隣国でありながら、両国間の関係が必ずしもよくはない国である。その原因は、ひとえにかつての日本の軍国主義政府による韓国蹂躪にあるといってよい。慶熙大学の創立者・趙永植学園長も悲劇の体験をもつ。すなわち、

趙博士は、第2次世界大戦の時、日本軍に学徒兵として強制的に徴兵され、平壤にいた。その折、母国のために決起したが、捕らえられ、6ヵ月を超える獄中生活を余儀なくされたのである。済州大学の趙文富総長も、少年時代、日本の植民地統治が本格化した時、経済政策の一環として、先祖代々、受け継いできた土地の多くを父が失って困窮するという凄惨をなめている。両大学の指導者は、ともにかつての日本政府によって残酷な仕打ちを受けている。その経験は、簡単に消去できないものとして胸中に刻印されているに違いない。それがなぜ、池田先生に名誉学術称号を贈り、先生を称賛するまでになったのであろうか。

それはひとえに、池田先生の前述したような韓国に対する姿勢、歴史に向きあう真摯な態度に他ならない。「無窮花ムグンファの花咲く、美しい朝の国—。その昔、仏教も、文学も、日本に伝えてくれた文化大恩の国—。一番近い隣の国・韓国—<sup>26)</sup>」その国を偏狭な国家主義に狂った日本は冒涇した。この歴史を日本人は絶対に忘れてはならない。このような池田先生の発言を聞いて感動しない韓国人は一人もいない。気むずかしく、ごこちない態度で接していた韓国の友人も、池田先生のこの一言を聞くだけで、それまでの態度が氷解し、人なつこく、真の友人としての姿勢で接してくる。慶熙大学の趙永植学園長も、済州大学の趙文富総長も皆池田先生の歴史認識、その上に立った日韓関係の新しい構築—これに心から賛同を惜しまないのである。

創価大学の1期生に金俊子さんという女子学生がいた。彼女は在日韓国人である。日本に生まれ、日本に育ちながら、祖国に対する日本の迫害の歴史、父母や同胞に対する日本の酷い仕打ちに心を痛めていた。日本の創価大学にいることは祖国に対する背信行為なのではないかと自分をせめることもあった。そんな時、創立者である池田先生に会い、先生の暖かい慈愛に包まれた。「アメリカ人だとか日本人だとか、また国家だとか民族だとか、そんなことは問題ではない。そんなことはちっぽけなことです。自由にのびのびと頑張りなさい<sup>27)</sup>」と先生は激励される。そして、創価大学の写真の裏に次のように揮毫した。「元来、人間には国境などはなかった。それがいつしか人為的に、国境がつくられていった。ゆえに私共は 国境の奥の次元の 人間連帯に 美しくも昇華しゆく 此の世に到達し生きゆくことを忘れまい」と。彼女はまた、池田先生に、韓国の民謡のレコードを贈ったことがあった。そのとき先生は「光差す 友の民謡聞き 華の夜半」とのお礼の句を届けられた<sup>28)</sup>。金さんはこれによって心の闇が晴れ、今では税理士として活躍されている。

池田先生のこのような韓国に対する歴史認識や、韓国の人々に対する態度は、まさに国家の壁を超えて、多くの韓国の人々の共感をえている。再び、趙永植学園長の言葉を紹介しよう。「私には世界のたくさんの国々に友人がおります。その中で最も尊敬する一人が池田先生であると、私は明言してはばかりません<sup>29)</sup>」と。また、済州大学の趙文富総長はいう。池田先生のような人に「名誉博士号を差し上げるのでなければ、誰に差し上げるのだ。このような人に差し上げることこそ、私たちにとって光栄ではないか<sup>30)</sup>」と。ちなみに、済州大学は開校して47年間、一度も外国人に名誉学位を授与したことはなかった。初の学位を日本人に授与するとい

うので、学内では「納得できない」という教授もいた。そうした人に対して、趙総長はきっぱりと上記のように言ったという。池田先生の民間外交は、国家ができないことを推進し、水面下で、国民の心を結び合わせているのである。

### 3) 人間の心の扉を開いて

池田先生の対話を武器とする民間外交はあらゆる民族や国家の壁を超えている。7000人にも及ぶ世界の指導者や識者との対話には、民族、人種、国家の差別を感じさせない。また、世界の著名な大学から贈られた230を超える「名誉学術称号」は、学問のあらゆる分野にまたがっている。法律、経済、教育、哲学、文学、そして理学、農学、工学にいたるまで、人文、社会、自然科学を問わない幅広い学識の持ち主であることをそれは物語っている。まさに人間外交であるということを感じさせるものである。池田先生の外交は、人間そのものの心の扉を開く愛の鍵なのである。

1974(昭和49)年5月、第1次訪中の時、池田先生は中国の幅広い、各界の人たちと交流を深めた。中でもとくに青少年との出会いを大切にしたい。ある学校で、先生は一人の少女の質問を受けた。「あなたはなんのために中国に来られたのですか」。先生は即座に答えた。「あなたに会いに来たのです<sup>30)</sup>」と。少女の顔には、一瞬にしてうれしそうな笑みがこぼれた。また、同年9月の初訪ソの際は、「なぜ宗教を否定しているソ連などに行くのか」との批判を受けた。それに対して先生は、「そこに人間がいるからです」と答えた<sup>31)</sup>。

先生の外交にはぶれがない。国際社会の思惑とか、国家の利益などを超越している。ただ、人間の心の扉を開き、魂の交流を深めるとの一点があるだけである。

ソ連との交流の突破口になったのは、1973(昭和48)年12月7日のことである。池田先生は、ソ連科学アカデミー会員のナロチニスキーと準会員のキムを創価大学に迎えて会談した。その時、ナロチニスキーの「なぜ入会されたのですか」という質問をはじめ、次々と浴びせられる質問に、池田先生は明解に答えられた。そして、先生からは「ソ連に対しては、日本人は怖いという感想をもっている。それをなくすには『ソ連に仏教寺院を建設する。モスクワ大学に仏教講座を新設する。教育国連本部をソ連に設置する。日ソ学生文化交流協会を開設する』ことが考えられる」という提案が出された<sup>32)</sup>。しかも、こうした会談は、堅苦しい雰囲気の中で進められたのではなく、なごやかに行われた。たとえば北方領土の返還という微妙な問題には、先生は「北方領土を私に売ってください」という意表をつく形で言われた。ナロチニスキーは思わず、「買ってどうするんですか」と聞いた。先生は「そこにお寺を作ります。寺院をつくって、あらゆる人が自由に参詣できるようにいたします。これによって、人々の心は和み、ソ連に親近感を持つでしょう」とユーモアを交えて答えられた。これには、ナロチニスキーもキムも、大笑いし、微妙な問題にも何か解決のための一筋の光明が投げかけられたような感じになった。会談を終えたあと、ナロチニスキーは、「池田大作という人物はすごい人であるということだけは聞いていたが、噂に勝る人間である」との感想をもらした<sup>33)</sup>。これが先生の

訪ソへの道につながっていくのである。

1990（平成2）年7月27日、池田先生は、クレムリンにおいて、ソ連のゴルバチョフ大統領と会見した。会見の時間は1時間半である。大統領としては、異例の最長時間である。二人の会見は、池田先生の「今日は、大統領と“けんか”をしに来ました」との発言で始まった。実りある論争を大いにしましょうとの意味である。話はゴルバチョフ大統領が進めるペレストロイカを初め、あらゆる方面にわたり、対話の花は大きく開いた。しかし、この会談には、ひとつの微妙な問題が潜んでいた。それは行きづまった日ソ関係を打開するひとつの道である懸案のゴルバチョフ大統領が訪日を明らかにするかしなかが注目されていたのである。2日前の日本の国会代表团との語らいでは、ゴルバチョフ大統領が日本側の領土問題を冒頭から持ち出すというやり方に腹を立て、交渉は全く不調に終わっていた。

池田先生は絶妙に話しを運び、ゴルバチョフ大統領に次のように話しかけた<sup>34)</sup>。「大統領とライサ夫人のロマンスは、よく知られています。（中略）新婚旅行は、どこに行かれたのですか。日本には、どうしてこられなかったのですか」と。大統領はすかさず応じた。「最初の質問には、訪問したとき答えます。日本には、ぜひ行きたい。私の念願は、実現すると思います」。先生は、「ライサ夫人とお二人で、春の“桜”の日本へ、秋の“もみじ”の日本へ、美しい季節においでください」と誘った。それに対して、ゴルバチョフ大統領は「できれば、春に日本を訪ねたい」と表明した。こうして、史上初となるソ連最高指導者の日本訪問が明言され、実現したのである。

この対談を克明に読んだ平和学のヨハン・ガルトゥング博士は、驚嘆してのべた。「池田先生の対話は絶妙です。もし私が外交官を養成する教官だったら、池田先生とゴルバチョフ大統領とのやりとりを教材に使います。先生の発言には、礼儀正しさがあ、ユーモアがあり、そして前向きな、人をはっとさせる斬新な提案があります。」<sup>35)</sup>と。

池田先生の民間外交は、国家や民族を超える。南アフリカ共和国のマンデラ元大統領との交流も人間外交の一端を物語る。

ネルソン・マンデラは、南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）に抵抗し、1962（昭和37）年に逮捕された。以来27年半にわたり獄中闘争を展開。「絶対にあきらめない男」といわれた。彼の闘争は、すべての差別の撤廃を実現し、人間の尊厳を勝ちとるための戦いであった。獄中で母の病死を、長男の事故死を知った。その苦しみを乗り越え、彼は人間解放の信念を曲げなかった。

その死闘が実り、1990（平成2）年2月11日、ついに解放された。晴れて自由の身になったマンデラは、アフリカ民族会議（ANC）の副議長として、来日することになったが、その折、「ぜひお会いしたい」と希望したのが、池田先生であった。その年の秋10月31日、東京で両氏は邂逅し、熱い抱擁をかわした。27年間、南アフリカの獄中にいたマンデラが、なぜ池田先生を知ったのであろうか。それにはひとつの運命の糸が働いていた<sup>36)</sup>。

それは、南アフリカの詩人ムチャーリの仲介にあった。ムチャーリは黒人解放の

夜明けを謡い、人権闘争の炎を詩に綴っていた。そんな折、1985(昭和60)年に、ムチャーリは、南アフリカの教育誌『HIT(ヒット)』に編集長から依頼され、4週続けて随筆を連載した。ムチャーリは、山積する南アの子供の問題に何とか解決の糸口を見つけられる資料はないかとさがしていた。その時目についたのが、日本の文学者の友から贈られた池田先生の著作『私はこう思う』(英語版は『ガラスの子どもたち』)であった。そこに目を留めたムチャーリは、先生の主張に共感し、まだ面識のなかった池田先生の主張を、東洋の哲人の思想として、子どもたちへのメッセージの意を込めて紹介したのである。そこにはこう謡われていた。「青春とは、困苦に満ちた時期である。だがそれは、希望の光が、溢れ出る時でもある。たえず未来に希望を抱いて成長する人間は、青春の歌の、真の歌い手である」、「彼らの活力を奪うようなことをするのは、自分の宝物を海に投げ込むに等しい行為である」等々。

このムチャーリの論文を獄中で目にしたのがマンデラであった。長い獄中生活で、マンデラが思索し、生きついた先は、青少年の健全な育成しかないという結論であった。そのマンデラの思索の結晶に池田先生の言葉が共鳴した。以来、マンデラは、池田大作はどういう人か、ぜひお会いしたいと念願するようになっていたのである。

その彼の夢が実現したのが、獄中から解放された8ヵ月後であった。1990(平成2)年10月31日である。真青な晴空のもと「ビバ! マンデラ!」の青年たちの大歓呼が響く。池田先生は、500名の青年たちと「自由の戦士」を歓迎した。「戦士」の顔は、くしゃくしゃにはころび、左手で先生の手をつかみ、右手を高々と揚げた。「1万日の獄中闘争」を勝ちとった勝利者の姿がそこにあった。マンデラは、「ぜひお会いしたいと願っていました。日本に来た以上、お会いするまで帰れません」と先生に語った。

会見の席上、池田先生は、マンデラに詩「人道の旗 正義の道」を贈って彼の人権闘争の勝利を讃えた。そして、先生は、マンデラに5つの提案をした。「第1に、教育の交流。第2に、南アフリカの芸術家の招聘。第3に、『人権』をテーマにした展示会の開催。第4に、『反アパルトヘイト(人種隔離)の写真展』の開催。第5に、『人権講座』の開催」である。マンデラは、そのひとつひとつに大きくうなずき同意した。その提案は後にすべて結実された。

池田先生と会見した夜、アフリカ各国の駐日大使主催でマンデラの歓迎会が開かれた。席上、マンデラは訪日の印象を以下のように語った。「滞日中、最も嬉しかったことは、池田先生にお会いしたことです。また、その際若い学生の方々が温かく迎えてくださり、歌まで歌ってくださった。私は、27年間、囚われの身で戦ってきましたが、“これで、その努力が報われた”と思いました」と。翌日、成田空港を発つ際も、マンデラは、見送った各国大使の方々にも、池田先生との出会いを「訪日の最大の思い出」として語ったのである。

それから5年の歳月がながれた。自由選挙を経て、マンデラは南アフリカ共和国の大統領に選出され、1993(平成5)年12月には、デクラーク大統領(当時)とと

もにノーベル平和賞を受賞した。そして、1995（平成7）年7月、国賓として再度、来日した。会見の冒頭、マンデラは池田先生に語った<sup>37)</sup>。「お会いできるのを楽しみにしていました。5年前の会見の様子は、はっきり覚えています。あの素晴らしい歓迎、創価大学の学生の皆さんも、じつに温かく迎えてくださった……。忘れられません」と。会見の中で、5年前と同じく、池田先生は後継者問題を話題に出したが、マンデラは初めて、「後継者は、ええ、おります」と意中の人の存在を明らかにした。その人こそ、後に大統領になったムベキであった。

1998（平成10）年4月、副大統領として来日したムベキと池田先生は東京で会見した。ムベキも28年の亡命生活を耐えぬいた人権の闘士である。頭の回転が速く、他者への尊敬心が強い。民衆の苦悩に敏感な人物である。マンデラはそこを見抜いたのである。池田先生はマンデラのムベキに対する以上の評価をムベキに素直に伝えた。するとムベキは先生に、「いえいえ大統領がなぜ、私をほめるのか、実は理由があるんです。本当のところ、大統領は私に借金してしまっていて、返したくないものだから、私を、おだてるのです」と答え、会談の席は爆笑に弾けた。二人がいかに強い信頼関係で結ばれていたかを物語る証左である。

この会談から1年後に、ムベキは選挙を経て大統領に就任するが、それにあたり、彼は「アフリカ・ルネサンス」を唱えた。ムベキは池田先生に言葉を続けた。「アフリカの国民は皆、いろいろな問題に直面しています。それに挑戦しなければなりません。課題に挑戦するに当たり、私たちとしては、『日本と日本国民の皆さんは私たちのパートナーである』との感触をもっておりました。それを今回、確認しました。そして、この場所に来て、私たちは強く、そのことを『実感』できたのです」と。間髪を入れず池田先生は答えた。「これまで、一番、抑圧されてきた人々こそが、一番、勝利し、一番、偉大な幸福をつかむ権利があります。反対に、いじめた側は、やがて夕日のごとく沈んでいきます。これが歴史の鉄則です」<sup>38)</sup>と。

池田先生は1960（昭和35）年10月、初めてニューヨークの国連本部を訪ねた。そこで生き生きと働くアフリカの若い指導者たちの姿をみて、「21世紀はアフリカの世紀」と喝破され、以来、アフリカ諸国と多彩な交流を重ねてきた。2008（平成20）年1月の「1・26 記念提言」の中でも、「アフリカ青年パートナーシップ計画」の設置を提案し、青年に対するエンパワーメントを押し出すことを勧めている<sup>39)</sup>。池田先生は、50年近く、アフリカを一貫して温かく見守り、その発展に陰に陽に支援を惜しまなかった。アフリカの国々の池田先生に寄せる信頼には絶大なものがある。

民間レベルの交流に話を戻そう。アメリカにモアハウス大学という大学がある。この大学は、公民権運動の指導者マーチン・ルーサー・キングの母校である。キリスト教プロテスタントの一教派であるバプティスト教会系の黒人大学だ。この大学にキングの遺影を顕彰するため、キング国際チャペルという教会が設置されている。実は、この教会が主催する「ガンジー、キング、イケダ展」が、2001（平成13）年から、世界各国を巡回中である。展示では、その名の示すとおり、インド独立の父であるマハトマ・ガンジーと、公民権運動の指導者マーチン・ルーサー・キ



ング、そして、池田先生の3人を、人類の偉大な指導者として顕彰し、その足跡、業績を紹介している。2006(平成18)年までに、21ヵ国・地域で開催され、35万人余りが鑑賞している。

これについて、事情を知らない人は、創価学会が宣伝のために開催していると曲解しているようである。ところが実態は、創価学会とは全く関係はない。アメリカのキリスト教会系の大学が自主的に開催しているのである。このチャペルの所長であるローレンス・エドワード・カーターは、この展示の目的を次のように説明する。「放っておけば、風化してしまったかもしれない。ガンジーやキングの非暴力の思想に新たな息吹を吹き込み、行動する人物、池田会長の存在を知ったとき、本当に、こういう人物がいたのかと驚きました」<sup>40)</sup>と。実に価値ある思想や人物に光をあて、それを普遍的な精神にまで高めて永続化をはかっていく池田先生の行動は、見る人にとっては驚異の存在としてわかるのである。カーター所長自ら9ヵ国に赴き、展示を実現し、その意図を語っている。所長の池田先生の思想を世界に広めたいとの熱意は赤々と燃えている。

以上、3つの角度から池田先生の民間外交のいくつかをみてきた。これによると、先生の民間外交がいかに卓越したものかがわかるであろう。また、その外交姿勢に全くブレがないことも理解できよう。あくまで対話を武器に、人間主義の視点に立ち、国家でなしえないきめの細かい外交を展開しているのである。しかも、時代の流れのうえからあるべき国家の視点を提示し、その方向に国家をリードしている。

今日、民間人やNGO(非政府機関)の働きは看過できないものになっている。民間人やNGOのあり方としては、国家や国際機関と対立するものではなく、それらと協調、協力し合いながら、時にはそれらにはできないことを補足していくことが望ましい。民間人やNGOの役割は、国家や国際機関と自然な形で相即不離の関係に立つことが理想的といえる。池田先生の民間外交は、まさにこの形をとっている。時には国家を後押しし、時には国家の不足している部分をさりげなく補い、時には、ギスギスした関係になりがちな国家間関係を円滑化する潤滑油としての役割を果たしているのである。こうした池田先生の人間外交について、東京大学教授の市川裕は次のように指摘する。

「思えば、日本の軍国主義に反対し、牢獄に入り獄死した日本人がいたということが、どれほど世界に対して誇りとなるか。それを語り継ぐ池田氏の世界的実践行動によって、日本がどれほど救われてきたか。我々日本人はもっとそのことを自覚し、肝に銘ずる必要がある。世界へ出て行けば行くほど、諸外国の現代史を知れば知るほど、その思いは募り、感謝の念がこみ上げてくるはずである。今、世界が望む指導的人物としてこの人の名を挙げて、その行動に学び習うことは、時代をともに生きるものの無上の喜びではなからうか」<sup>41)</sup>と。

池田先生の対話を武器とした民間外交は、広く世界に受け入れられ、21世紀を平和の世紀にするべく、人々をリードしているのである。

## 5. むすびにかえて

池田先生は、自身の平和行動の原点を3点にわたってまとめられている<sup>42)</sup>。

第1は、先生自身の戦争体験である。第二次世界大戦で先生は出征した長兄をビルマで喪い、家を空襲で失った。とくに、長兄が中国に出征し、一時帰国したときに語っていた言葉が脳裏を離れないという。それは、「戦争は決して美談なんかじゃない。結局、人間が人間を殺す行為でしかない。そんなことが許されるものか」<sup>43)</sup> というものであった。誰よりも優しくあった長兄だけに、その激しい言葉は先生の胸に深く突き刺さったという。そして、その長兄が戦死したとき、気丈な母が遺骨を抱きかかえ、身体を震わせて悲しんでいる姿は永遠に忘れられないと強調する。一人の青年として、池田先生は身をもって、戦争の愚劣さ、醜悪さを、無惨さを痛いほど味わったのである。

第2に、師の精神の継承である。第2次世界大戦のさなか、軍国主義と戦った牧口常三郎、戸田城聖の両氏は逮捕され、牧口は獄死した。生きて出獄した戸田は、師匠・牧口の精神を継いで平和の闘争を開始した。池田先生は、その戸田の叫びである「この地上から悲慘の二字をなくしたい」との夢を継承し、実現するために人生のすべてをかけているのである。

第3に、宗教者としての社会的使命である。宗教は単に座して自分の悟りを開けばよいというものではない。苦悩する人々や世界に向かって、敢然と立ち向かい、問題を解決していくのが大乘仏教の魂である。戦渦や貧困、そして環境破壊が進行するこの世界にあって、平和の旗を毅然と掲揚し、行動しているのが池田先生である。

こうした先生の姿に、世界の心ある多くの識者が、また人々が、称賛の声を惜しまず、先生の平和思想を広く受け入れている。50数年前、核戦争の悲惨な結果を警告する宣言書「ラッセル＝アインシュタイン宣言」に署名し、池田先生と何回か会見して、対談集『地球平和への探求』を著したジョセフ・ロートブラット博士は次のように語った。「池田先生の言葉は、絶望に苦しむ人々に希望を与え、弱き者に強さを与え、敗者に勇気を与える」<sup>44)</sup> と。じつに先生の言動は、行き詰まった世界に希望と強靱さと勇気を鼓舞する一条の光明となっている。

ロートブラット博士は次のようにも指摘する。「長年にわたり、世界の平和についての考え方は、古代ローマの格言『平和を願うならば、戦争の準備をせよ』に込められた思考が支配的でした。(中略)しかし歴史を通じて、戦争への準備が、概して平和ではなく、戦争をもたらしてきたことは、まぎれもない事実です。(中略)今、人類が第三の千年紀に生き残るために、この古代ローマの格言を、『平和を願うならば、平和の準備をせよ』という格言へと書き改めるべきです」<sup>45)</sup> と。

じつに、池田先生の平和思想は、「平和を願うために、平和の準備をするもの」に他ならない。それは決して現実を無視して単に平和を祈り、平和を説くものではない。しっかりと現実の大地に深く根をおろし、平和の理念を高らかに掲げながら

荒れ狂う人間社会の中での行動に裏付けられている。戦争の根となる原因を断ち切って、平和の種子を植えつけている。その種子はやがて大樹となり、平和の大輪を咲かせ、平和の果実を実らせていくことになるであろう。

注

- 1) 『聖教新聞』2008年1月20日。
- 2) 『聖教新聞』2008年1月12日。
- 3) 名誉学術称号の詳細な内容については、東洋哲学研究所編『世界が見た池田大作』（東洋哲学研究所 2007年）参照。
- 4) 『聖教新聞』2000年1月19日。
- 5) 『聖教新聞』2007年8月25日。
- 6) 『聖教新聞』2008年1月26日。
- 7) 池田大作『新人間革命 第4巻』（聖教新聞社 1999年）363頁。
- 8) 『聖教新聞』2006年2月19日。
- 9) 『聖教新聞』2006年1月15日。
- 10) 『聖教新聞』2006年4月19日。
- 11) 池田大作『新人間革命 第1巻』（聖教新聞社、1998年）60頁。
- 12) 同上。
- 13) 『聖教新聞』2006年2月26日。
- 14) 『聖教新聞』2002年1月12日。
- 15) 『聖教新聞』2001年12月9日。
- 16) 池田大作／ヨハン・ガルトゥング『平和への選択』（毎日新聞社、1995年）23－29頁。
- 17) 『聖教新聞』2007年12月25日。
- 18) 前原政之『池田大作 行動と軌跡』（中央公論新社、2006年）
- 19) 池田大作『私の世界交友録Ⅱ』（読売新聞社、1998年）
- 20) 同上、96－97頁。
- 21) 1990（平成2）年10月24日、筆者との懇談メモ。
- 22) 池田大作『中国の人間革命』（聖教新聞社、1993年）223頁。
- 23) 同上、278－282頁。
- 24) 『産経新聞』2005年5月9日。
- 25) 池田大作『大道を歩む 私の人生記録Ⅲ』（毎日新聞社、2002年）
- 26) 創価大学卒業文集『草創の誓い』（1975年）。
- 27) 池田大作『大道を歩む 私の人生記録Ⅲ』（毎日新聞社、2002年）68頁。
- 28) 『聖教新聞』1999年5月17日。
- 29) 同上。
- 30) 池田大作『中国の人間革命』（聖教新聞社、1993年）137頁。
- 31) 前原、前掲書、190頁。
- 32) 『聖教新聞』1973年12月8日。
- 33) 1973年12月7日、筆者メモ。

- 34) 池田大作『大道を歩む 私の人生記録Ⅲ』（毎日新聞社, 2002 年）49 頁。
- 35) 1990 年 10 月 24 日, 筆者メモ。
- 36) 池田大作『大道を歩む 私の人生記録Ⅲ』（毎日新聞社, 2002 年）80－81 頁。
- 37) 同上, 86－87 頁。
- 38) 同上, 91－92 頁。
- 39) 『聖教新聞』2008 年 1 月 27 日。
- 40) 前原, 前掲書, 206 頁。
- 41) 『聖教新聞』2006 年 11 月 4 日。
- 42) フェリックス・ウンガー／池田大作『人間主義の旗を 寛容・慈悲・対話』（東洋学術研究所, 2007 年）16－18 頁。
- 43) ロナルド・ボスコ／ジョエル・マイアソン／池田大作『美しき生命 地球を生きる 哲人ソローとエマソンを語る』（毎日新聞社, 2006 年）36 頁。
- 44) ジョセフ・ロートブラッド／池田大作『地球平和の探求』（潮出版社, 2006 年）257 頁。
- 45) ジョセフ・トートブラット／池田大作, 前掲書, 26－27 頁。